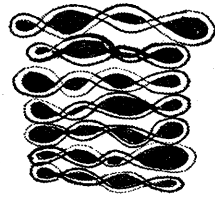


遺棄された

子ども



森下みさ子

泣き虫毛虫挟んで捨てろ

ペンかくと「待つてました」とばかりに囃したてられ

たこの文句は、「泣虫小虫裏の山コさ飛んでえげ」（秋田

・宮城）とか「泣虫毛虫挟んで捨てろ小川へ捨てろ」

（千葉・群馬）など、少しずつ形を異にしたがらも全国

各地に伝えられているそうである。またこれと対をなす

ものであろうか、「おまえは川から拾ってきた」「橋の

下から拾ってきた」といういい方も、様々な地方で子ど

もが親に聞かされ記憶の端に留めているもののようなだ。

「捨てろ」といわれてなおさら泣きたくなる心もとない

気持や「拾ってきた」と冗談交りに教えられた時の頼り

なさは、幼い頃誰かが経験したことらしい。それだけ

「捨てる」「拾う」ということは、この世に現れて聞

もない小さき者に寄せる人々の、共通の想いの何がか

を告げているのであろう。

*

民俗学の報告するところによれば、ほんとうに子ども

を捨て去ってしまうのではなく、あらかじめ頼んでおい

た人に拾ってもらって改めて育てる、という「儀礼的な

捨て子」の慣習は各地にあった。捨てられるのは、子ど

もがよく育たない家の子、父母の厄年に生まれた子、人

が死んだ日や大病・怪我の際に生まれた子、その他利口

すぎる子や美しすぎる子、早く歩きすぎたり人並以上の

能力を持っている子、鬼子といわれる子などである。捨

て場所は、氏神様の境内、村の出口にあたる四辻、悪疫

や不吉なものの侵入を防ぐため村はずれに置かれた塞の

神の前、橋の上や道ばた、所によっては箕の中に入れて海や川へ流すこともあった。そうして捨てられた子は、前もって頼んでおいた子育てのよい家の人や易者の言によつてその子と相性がよいとされる人などに形の上で拾ってもらうのだが、そこには子どもに新たな命と良運を授けてくれる者の靈的なイメージがあったのであろう、塞の神の前を偶々通りかかった人に拾ってもらつたり、渡り歩きの塩売りや家舟（水上生活者）など村の人の手を借りるといふ「呪術的な意味」が窺えるものもある。

こうして一時的に拾ってくれた人は、拾い親、捨子親などといわれ、その子の命名を頼まれたり、成長の折節に祝いの品を送つたり、正月や盆に供え物をもらつたりなどして、生涯を通じて呪術的な仮の親子関係を継続する。日本には昔からオヤといつても実の親の他に、産婆の取揚親、最初に乳を含ませる乳親、名附親、守親など、子どもの成長をめぐるあこれと力を貸し与える親がわりがいて、拾い親もそのままでは親元でじっくり育ちにくい子を救う役目を担つていたと考えられている。

*

しかし、これらは子どもの成育の側にたった穏当な捨て子の解釈である。民俗学者岩本通弥氏は、捨てることでこの世から葬り去つてしまふようなもつと凄惨な捨て子にも着目し、捨てる親（家）の立場から別な解釈を紡ぎ出そうとしている（『月刊百科』81・2）。すなわち、家の罪を背負わせ、その繁栄のための生贄として子どもを捨て去るといふ、表に現れにくい民俗的思考にも踏みこんでみようというのである。

家の繁栄を祈願する儀礼に子どもの演じる役割は極めて多く、また「子宝」の諺が示すように、子どもが家の繁栄のしるしとなることもよく知られている。家の祭の主宰者であり、盛衰を司る存在としての子ども、だからこそであろうか、子どもを遺棄し供養することによって災厄から家を守り富ませるといふ考え方も生まれてくる。たとえば、昔話や今昔物語には老いた親の病を治すには子どもの生き肝がきくといわれ仕方なく子どもを殺すが、その孝行ゆえに子どもも生き返つて幸せに暮らし

たという話が見受けられる。これは親の生(十)のために子どもの死(一)が求められる例だが、家が富んでいる(十)ことの説明に異常な子ども・崇られた子ども(一)の誕生を語り伝えている場合もある。「六部殺し」といわれるどの村にも伝わる話がそれで、「村一番の長者は大金を持っていた旅の六部を殺して財産を奪ったので家は栄えたが、その祟りで代々子が若死したり片輪である」という因縁話である。昔話ではもっと恐ろしく、いつまでも口をきかなかった子が名月の晚小便をさせに外に連れ出すと、「おどつつあん、ちょうど今夜のような晩だったね、六部を殺したのは」と口を開き、はっと見ると六部とそっくりな顔をしていた(宮城)というように語り継がれている。

岩本氏は、家の繁栄と子どもの死・不具の対立で形づくられるこれらの論理は、捨て子にも通用するという。前記した捨てられる子どもの中には歯が生えていたり異様な形相をして生まれた子で将来親を喰い殺すとされる鬼子がいるが、特別な時に生まれた子や異常な能力を持

つ子・厄年児などもこの鬼子と同じく、結局は厄を負って頭れた子であり、放っておけば家に災をもたらす悪鬼なのである。そして民俗的な想像力の圏域では、こうした異常な出産は六部殺しの話のように先祖や親の悪業の報いとされ、家の贖罪として子どもを捨てることによってその罪悪から免れるという考えを生み出してゆく。

*

このような思考は、育児書の頻出する江戸中期以降、『捨子教誡の謠』(橘義天)のような書によって「産み落としたるその儘を人にそだててもらわんと古着や綿に畏み巻き余所の軒ばや辻中に捨て置けるさえかくばかり誠めたまう御敵命必ず背く事なかれ」と禁止されるが、なかなかどうして、同じく江戸の雑談を集めた『耳袋』には「賊心の子を知る親の事」と題して、瓜をだましとった子を捨てる親の話がちゃんと記されている。この親、捨てた後四、五年してその子のゆく末を見にゆき、たばこやでよい若者に育っている様子「残念なる事をせし」と帰ってくるが、又二、三年して尋ねると、やはりその

子が大きな盗みをして拾い親にまで迷惑をかけたのと、「よくこそ見限りて、よくも執着を放ちける」と都合よく自慢しているのだから滑稽ではあるが、『耳袋』風に味をつけされた似非現実的な捨子譚ということができよう。

*

ところで子どもと家の対立関係をもっと広い視界に求めたとき、私たちはすさまじい捨て子に会い。山中に捨てられた伊吹童子、または酒呑童子である。母の胎内に宿ること三十三か月、生まれ落ちた時すでに髪の毛が黒々と肩まで垂れ、齒は上下生えそらい、乳母の手の中で目をかっと見開いて「父はいづくにましますぞ」と人語を発した、という類まれな怪童である。やはり鬼子と称して山中に捨てられるが、虎狼野干の類に守護されてたくましく成人し、まさに鬼神の如く人々を震撼させるほどの威力を振うようになる。不思議な出産、山中への捨て子、虎狼野干に育てられ、いつまでも垂髪の童形で荒々しい力を振ったという点は弁慶にも通ずるものであ

り、その共通性をふまえて「捨て童子」型の話にいい及んでいるのが、佐竹昭広氏の『酒呑童子』異聞』である。瓜をだましとった子は盗みを働いて家を沈めるが、これら捨て童子は大盗賊と化し、もっとスケール大きく人々の生活を破壊し荒ふる力を発揮したのであった。

こうして遺棄された子どもは日常を脅かす怪威へとつくりあげられる一方、もっとささやかな形で人々のイメージの裡に抱きとられることもある。圧死せられた赤子の霊である若葉の霊魂と家を富ませる精霊座敷わらしとの関連を説いたのは折口信夫であるが、両者が直接結びつくかどうかは別としても、子どもの霊がどこかに宿っていて家の盛衰を見守っているという幻象は、私たちに、「子ども」をとらえる民俗的な思考の広さを告げてくれる。同じくイタズラ者だが時として富をもたらす河童や、オギャアオギャアと泣いて道ゆく人を呼びとめるノツゴなども、葬り去った子をどこかで留め置き、自分たちの幸不幸と結びつけて呼び寄せようとする人々の想像力として、興味深く映じてくるのである。